



日本SPF豚協会だより

Report of JAPAN SPF Swine Association 2001.10 第5号



仲間づくりで元気なSPF豚生産を

—国産SPFポークセミナー北海道大会を終えて

●北海道大会大会委員長 山中 茂樹
(前山中畜産代表取締役)

去る9月27日、国産SPFポークセミナー北海道大会が開催されました。折り悪しく狂牛病の風評被害が吹き荒れ、畜産業界が揺れ動く真ただ中、直前まで関係者の参加が危ぶまれましたが、地元北海道をはじめ、全国各地から200名を超す参加者をお迎えでき、大会長としてほっと胸をなで下ろしております。また、前回宮崎大会でお会いした多くの方々に再会できたことは大きな喜びでした。

今回のセミナーの大きな特徴としては、養豚セミナーにとどまらず、「SPF豚の生産から販売、そして消費者まで」をメインテーマに、広くSPF豚について考えるものにしたという点がありましたが、各講師、パネラー、コーディネーターの方々のおかげで、大変充実した内容とのご好評をいただきました。また、北海道ならではのSPF養豚の取り組みについても、情報提供できたのではないかと思います。

セミナー後の懇親会にも約190名という多数のご参加をいただき、情報交換、交流の場として大いに盛り上がったことは大変うれしく思いました。また、ホクレンのご尽力のもと、会場内で一般応募者によるSPF豚肉料理コンテストの表彰および受賞料理の試食等が行われ、



消費者との交流もはかれたと思います。

さらに、前回の反省としてあげられていた「一人でも多くの養豚家にSPF豚を理解してもらう機会にしたい」という点ですが、道内においては養豚協議会等を通じてPRした結果、多くの生産者の方にご参加いただきました。今後このセミナーが回を重ねる中で、養豚家のネットワークが広がり、SPF認定農場増大の一助となれば、と願っています。

現在、食肉を取り巻く環境の厳しさは、一畜種のみならず、深刻さを増す一方ですが、日本の畜産を守るには、元気に仲間づくりをすすめることが第一だと思います。

最後になりましたが、今回のセミナー開催にあたっては、ホクレンをはじめ関係各位に多大なるご協力を賜りました。無事成功裡に終えることができたのも皆様のおかげです。心からお礼申し上げます。

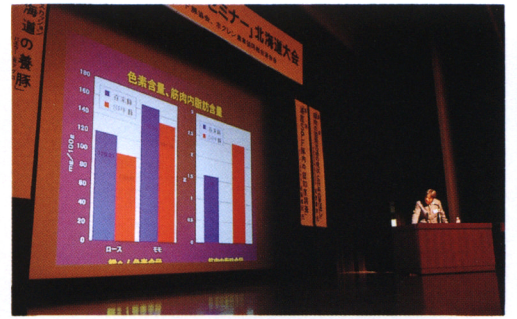
SPF
養豚の
はじまり
⑤

なにが原因かよくわからないまま、なんとか繁殖にこぎつけた母豚から生まれた Secondary SPF豚には、脚弱などのトラブルはほとんどみられなかったが、厚脂は相変わらず多くの豚に発生した。このころ、米国でも Primary SPF豚の脚弱は多発しており、leg weakness として数多く報告されている。

このような苦難続きの SPF養豚であったが、ほのかに事業化の可能性がうかがわれるデータも得られるようになり、1968年（昭43）、民間の手で我が国初の SPF豚農場が誕生した。



200名を超す参加者で熱気にあふれたセミナー会場



参加者からは熱心な質問も寄せられ、活発な意見交換も



会場ロビーには各地のSPF豚銘柄豚紹介はじめ、ピラミッド提供のパネル等が展示された



協会パンフレットや(財)日本食肉消費総合センター提供のリーフレットも

国産SPF豚ポークセミナー 北海道大会

生産から販売まで

陽光きらめく春の宮崎から涼しい秋の北海道へ。去る9月27日、「国産SPFポークセミナー」北海道大会が札幌市の共済ホールにて開催されました。参加者は道内外から205名。直前に降って湧いた狂牛病騒動の中、協会主催のセミナーとしては初の地方開催となった3月の宮崎大会同様の盛況ぶりとなりました。

セミナーは全農札幌支所の山本純也主任調査役の司会のもと、まず赤池洋二会長が「今回のセミナーのテーマは養豚にとどまらずSPF豚肉の“生産”から“販売”までを考えるとというもの。北海道においてはその一貫した流れが確立されている。ぜひご参考いただきたい」と挨拶。続いて山中茂樹大会会長(有)山中畜産代表取締役)の「狂牛病の風評被害が牛にとどまらず肉全体に及ぶことが懸念されるが、このようなきこそ、安心、安全を謳って



セミナーの司会進行役を務めた全農札幌支所主任調査役・山本純也さん

いきたい」との挨拶のあと、能登章友・伊藤忠商事(株)生産流通部長の基調講演に入りました。

「豚肉の国際流通の現状と将来の見通し」と題した能登部長の講演は、豚肉の国際情勢について豊富なデータをもとにわかりやすく説明、「日本の豚肉自給率はH12年度で58%、輸入肉が今後増えることは必至。チルドの比率も高くなる。生産からすべて明らかになるものも増え、安心・安全は当たり前になっている。対抗する国産品はすみ分けは可能だと思うが、商品(肉)の情報をもっと明確に伝える努力が必要。SPF豚肉には期待できるが、安心・安全はもちろん美味しい肉であることが不可欠」との示唆をいただきました(4ページ講演要旨参照)。

次にホクレン道央支店食肉販売課の佐藤孝紀氏より、今年3月、札幌市内のSPF豚肉取扱店周辺地域の主婦を対象に実施した「道産SPF豚肉に対する認知度調査」の結果と考察について報告がありました。佐藤氏は、会場内でも豚肉購入頻度のアンケートをとるなどしながら詳

しい調査内容を報告され、前回調査時（H11年5月）に比べ、SPF豚の認知度は確実に上がっていること、一方でその特徴を理解している人は少ないこと、認定マークの浸透が購買・販売意欲の増加に大きくつながること、などを説明されました（5ページ講演要旨参照）。

休憩後、「北海道の養豚」をテーマにパネルディスカッションが行われました。パネラーは山崎 昶・北海道立畜産試験場専門研究員、日浅文男・(有)アグロ代表取締役、堀田史朗・北雄ラッキー(株)チーフバイヤーの3氏。岩瀬俊雄・ホクレン生産振興部主任技師をコーディネーターに、本セミナーのテーマである「生産から販売まで」を踏まえ、北海道のSPF豚の歴史と現状、今後の課題に至るまで、多岐にわたる議論が展開されました。（3ページ参照）。

最後に、ホクレン農業総合研究所の佐々木 渉氏による「SPF豚肉の特性について」の研究発表が行われました。これはSPF豚の肉質特性のうち「外観」「食味」「食感」について、通常飼養豚と比較対照試験を行ったもので、SPF豚肉の特性として「色が淡く、筋繊維が細かく、筋肉内脂肪も多い。結合組織の崩れも早く、加熱しても固くなりにくい」などの特徴があることが報告

されました（5ページ講演要旨参照）。

以上豊富な内容で、参加者からは「充実していて有意義だった」「大変参考になった」という声が数多く聞かれ、セミナーは大好評のうちに幕を閉じました。

セミナー終了後、ホテルモントレ札幌に場所を移して行われたレセプションにも約190名という多数の参加がありました。会場に用意された道内産SPF豚肉や加工品などを味わいながら、情報・意見交換、旧交を温める場として盛り上がりました。途中、セミナー開催に先だって行われた、道産豚肉を使ったオリジナル豚肉料理コンテストの入賞者と料理の披露および表彰式があり、入賞者には賞品としてSPF豚肉が贈られました。最優秀賞に選ばれた料理は運ばれた途端長い列ができ、あっという間になくなるほどの人気でした。

深刻な問題が畜産業界全体を揺るがす中、暗い雰囲気吹き飛ばすような活気にあふれた1日となったセミナー。次回は来年秋、一旦東京に戻って開催されることとなりました。多くの皆様のご参加をお待ちしております。

最後に、北海道大会開催にあたってはホクレンはもとより地元北海道の関係機関、および関係者の皆様に多大なるご協力を賜りました。ありがとうございました。

さらに内容充実で好評 参加者は200名超える



波岡茂郎北海道大学名誉教授の祝辞から始まったレセプション(上)



運ばれるやあっという間になくなった最優秀賞受賞料理(左)

次回は東京で開催、との全農ピラミッドからの挨拶に拍手がかっさい(右)



料理コンテストで最優秀賞に選ばれた高西満広さん(左)に賞品目録を手渡す山中大会長

大会長杯コンペは千葉の佐々木さんが連覇

翌日、前回の宮崎大会に続き、大会長主催のゴルフコンペが有志参加により行われました。あいにく前日までの好天とは違って変わった強風の中、皆さんスコアメイクに苦しまれたようです。結果は千葉の佐々木作三さんが宮崎に続いて優勝、女性の部では宮崎の守山京子さんが優勝されました。

パネリストは、北海道立畜産試験場養豚科の山崎専門
 研究員、(有)アグロの日浅社長、そして、北雄ラッキー(株)
 の堀田チーフバイヤーの3名。



山崎 和さん

まず山崎氏が、大ヨークシャー種
 系統豚「ハマナスW1」の造成やホ
 クレン滝川スワイン・ステーション
 立上げの苦労話（当初は、出荷豚の
 バラツキが大きかった、など）や、
 北海道にSPF養豚が定着していっ
 た経緯、関連する養豚技術の変遷など
 を、短い時間の中でコンパクトにま
 とめてくださった。

次に日浅氏が、脱サラでSPF養
 豚へ飛び込んだこと（その理由は話さ
 れなかったが）、生産者としてのSP
 F豚肉へのこだわりから、豚肉宅配、
 SPF豚しゃぶしゃぶ専門店「いの
 こ家」を開店するまでに到ったこと
 など、淡々とお話しされ、セミナー参
 加者、とりわけ生産者の共感を得た。



日浅 文男さん



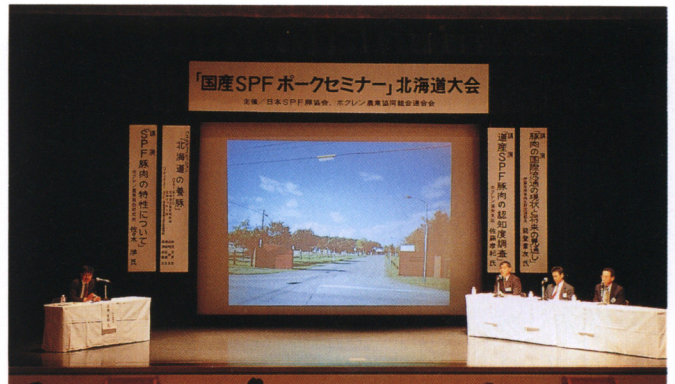
堀田 史明さん

続いて堀田氏が、SPF豚肉を北
 海道の量販店として初めて銘柄確立
 されるまでの経緯や、消費者の評価、
 反応などを話され、また、冷静な消
 費動向分析と判断に基づき、今後の
 SPF豚肉販売に対して示唆に富ん
 だ提案もいただいた。加えて、協会
 認定マークの認知度向上に対する強
 い要望が示された。

パネリストにそれぞれ話題提供をいただいた後、デ
 ィスカッションに移った。

まず北海道でSPF・CM農場を営んで
 いる生産者（ゲズント農場社長の勝木
 さん）が、冷静な計数分析による的確
 な経営判断を心がけて結果を出して
 いる話をされたが、特に参加してい
 る生産者の方々が、当たり前とはい
 え改めてその重要性を認識したの
 ではないだろうか。

また、「いのこ家」の料理長やフロア・
 マネージャー（石黒氏、日浅順一氏）
 には、SPF豚肉の柔らかさや美



味しさを活かしたメニュー作りを心か
 けていていること、初めは関係者ば
 かりだったが最近は家族連れや若い
 女性が増えたこと、冷しゃぶサラダ
 などが好評であること、などお客
 様に接してこそ、の生の声を聞くこ
 とが出来た。さらに、ホクレン道
 央支店のSPF豚肉流通担当者によ
 るセット販売の苦労や、売り場サイ
 ドのパーツ対応ニーズに応えること
 の難しさといった話は、生産サイ
 ドに身を置くものが普段知り得な
 いものだと感じた。

続いて、道外の参加者からの発言も
 いただいた。

自ら販売まで取り組んでおられる
 千葉の会員（株林商店社長の林氏）
 は、札幌の量販店やデパートの食肉
 売り場をセミナー前に早速見学、販
 売取り組みの実状を研究して来た
 とのことだった。

また、北海道のSPFが、一県単位
 とはいえ生産ピラミッド全体で生
 産から販売まで一貫した取り組み
 を行っていることに敬意を表したい
 と同時に、広範囲な府県にまたが
 る他ピラミッドでは難しさがある
 もの、取り組んで行かなければなら
 ない、との表明もあった（株シム
 コの高橋氏）。

ディスカッションは、総じて、限ら
 れた時間の中では多岐に亘り過ぎ
 た感もあり、議論を深められなかつ
 た面は否めない。

しかし、北海道のSPF養豚が、生
 産から販売までの強い連携の下、
 元気に、着実に、目指すべき方向
 に動いていることを参会者に実感
 してもらえたことと思う。（パネ
 ルディスカッションコーディネー
 ター・岩瀬俊雄）





豚肉の国際流通の現状と将来の見通し

伊藤忠商事(株) 生鮮流通部長
能登 章友

I. 世界の豚肉需給動向

1. 世界の豚飼養頭数 (単位: 1,000頭)

- ①中国397,000、②欧州159,377、③北米72,764
- ④南米40,509、⑤アジア33,780、⑥ロシア26,000
- ⑦オセアニア2,600

2. 世界の豚肉輸出入状況 (単位: 1,000MT)

- 主な輸出地域: ①欧州1,309、②北米610、③アジア199、④南米110、⑤中国100
- 主な輸入地域: ①アジア1,282、②北米403、③ロシア353、④欧州137、⑤南米121、⑥オセアニア20、⑦ロシア1

3. 世界の豚肉消費量 (1,000トン)

- ①中国37,840、②欧州19,384、③北米9,332、④アジア5,262、⑤南米2,792、⑥ロシア2,467

※以上のことから、中国は世界の豚の54%を飼養し、世界の豚肉消費量の49%を占めている。また、中国を除くアジアは豚肉輸入地域であることがわかる。

II. 世界の家畜疫病(口蹄疫)発生状況 (2001年度)

- 2月 イギリス、モンゴル、台湾
- 3月 フランス、アイルランド、アルゼンチン
- 4月 クエート、ウルグアイ
- 5月 カタール

※これにより、フランス、イギリス、アイルランド、オランダからの豚肉輸入ができない。また、今春、ヨーロッパで発生した豚コレラのため、スペイン、ドイツからの豚肉輸入ができない。したがって、ヨーロッパから輸入できる国はデンマーク、ハンガリーぐらいである。

III. 日本の豚肉動向

1. 豚肉輸入の現状 (単位: MT)

- チルドポーク: <平成8年度(168,102)>①台湾78,610(47%)、②アメリカ76,975(46%)、③カナダ7,827(5%)、⑤その他4,690(2%)、

<平成12年度(192,938)>①アメリカ129,837(67%)、②カナダ43,949(23%)、③その他19,151(10%)

●フローズンポーク: <平成8年度(495,236)>①アメリカ65,707(13%)、②カナダ33,207(7%)、③デンマーク121,404(25%)、④台湾187,878(38%)、⑤その他87,040(17%)、<平成12年度(457,383)>①アメリカ71,190(16%)、②カナダ84,139(18%)、③デンマーク194,836(43%)、④その他107,218(23%)

●輸入量の推移: わが国の豚肉輸入数量は昭和60年に約20万トンであったが、年々増え続け、平成8年には約65万トンに達した。その後、いったん50万トンまで下落したが、現在では平成8年のレベルまで回復している。

2. 日本における豚と畜頭数の推移

わが国の豚と畜頭数は、平成元年の約2,100万頭をピークに、その後減少を続け、平成11年度には1,600万頭近くまで下落した。

3. 豚肉関税緊急調整措置(SG)発動の仕組み

第一四半期から第三四半期までの間、各月の累計輸入数量が過去3年度の同時期平均累計輸入数量の119%に当たる発動基準数量を超えた場合に、超えることとなった月の翌々月の初日から当該年度の末日まで基準輸入価格が引き上げられる。

※日本の豚肉動向のポイントは

平成12年度の豚肉自給率は58%である。昭和61年から平成12年の間に豚肉輸入は290%に増大した。また、同時期の国内と畜頭数は80%に減少した。輸入豚肉のチルド比率は33%であるが、現在の精肉用主体から加工用へもシフトが進み、今後も増加が見込まれる。

IV. 今後の世界豚肉—米国における最新事例

●Seaboard Farms Inc. (オクラホマ州ガイモン市)

マルチサイト方式を取り入れた一貫生産(Total Vertical Integration System)により、原種豚の生産からはじまり、約18万頭の母豚から年間約380万頭の豚を、自社飼料工場の厳格な管理で生産した飼料で育て、世界でも最先端をいく近代的カット工場へと畜・カットするという、1980年代には夢のような生産システムを実現。品質管理があらゆる面で行き届いているため、最も安全で、日本の消費者のニーズに応えられる高品質の豚肉が生産できるといわれている。1日の処理頭数: 16,000頭。



「道産SPF豚肉」の 認知度調査

—調査結果とその考察—

ホクレン道央支店

佐藤 孝紀

札幌市内の販売店から3 km以内に居住する主婦300人を電話帳から無作為に抽出し、電話による聞き取り調査により実施した。結果は次のとおり。

購入頻度：月「3~4回」購入が最も多く、ついで「7~9回」、「10~14回」と続き、平均では7.4回であった。

SPF豚を知っているか：「知っている」「聞いたことがある」は77%に達し、特に20~30歳代では90%近い人が知っていた。

SPF豚の特徴について：「知っている」「何となく知っている」を合わせると約60%近くになるが、4割の人は知らなかった。

SPF豚をどこで知ったか：「店頭」が最も多く、「テレビ」「新聞・雑誌」とつづいている。

SPF豚肉を指定して買っているか：毎回指定して買っているのは17.9%、何度か買ったことがある人は73.5%であった。

食味について：概して良好な評価であったが、特に「臭みがない」については高い評価が得られた。

価格について：「商品に見合う価格」33.8%、「他の豚肉と変わらない」41.9%であった。

認定マーク：「知っている」「何となく知っている」「知らない」それぞれ30%台であった。

SPF豚に対する関心度：「きれいな環境で育った豚肉」に関心が集まり、つづいて「やわらかい肉質」の順になった。

今回の調査結果から分析すると、①豚肉は常食化(7.4回/月購入)している、②SPF豚の認知度は子供のいる世帯ほど高い、③SPF豚は知っているが、その特徴は知らない人が多い、④SPF豚に対する関心度は高い、⑤SPF豚に関する情報を若い世代では「テレビ」、中高年では「新聞・雑誌」から得ている、⑥SPF豚の特徴を理解している人の多くは「価格は高くない」「臭みがない」と評価している—といえる。



SPF豚肉の特性について —SPF豚の肉質に関する研究—

ホクレン農業総合研究所食品研究室

佐々木 渉

「やわらかくて美味しい」との評価を得ているSPF豚であるが、その肉質特性を示唆する理化学的知見は皆無に近い。そこで、この点を重点に調査を行い、今後のSPF豚生産振興に役立てることとした。「外観」「食味」「食感」については官能的に差が認められている。今回は同一系統の豚を用い、普通に飼育された豚とSPF環境下で飼育された豚の肉質特性を「外観」「食味」「食感」について理化学的見地から調査し、比較した。

外観特性：SPF豚肉の特徴である「淡い色調」に関して、総ヘム色素量を測定したところ、SPF豚において顕著に低い値を示した。また、色調に影響を及ぼすと見られる筋肉内脂肪含有量をロース芯部で調べたところ、SPF豚の方が有意に高い値を示した。

食味特性：旨味成分を測定したところ、予想に反してSPF豚に少ない傾向がみられたが、その分解生成物である、イノシン、ヒポキサンチンの増加が認められた。また、遊離アミノ酸18種類の多くはSPF豚でその含有量が高く、中でもグルタミン、グリシン、アラニンで顕著な差が認められた。これらの事実から、SPF豚肉において熟成がより進んだ状態にあることによって良食味が発現されると推察された。

柔らかさ：加熱冷却後の破断強度測定において、SPF豚肉の柔らかさが示唆されているが、理化学的見地から組織構造を見てみると、筋線維が細く、かつ筋線維間に空隙が多いことが明らかになった。また、筋線維の断片化、結合組織の脆弱化も進んだ傾向にあり、自己消化酵素であるカルパインの活性値では、SPF豚肉に顕著に高い値が得られた。これらの結果から、SPF豚の柔らかさは若齢出荷による筋繊維の若さ(未成熟)と熟成期間の自己消化作用の強さが影響していると思われる。現在は、「SPF豚肉の熟成は在来豚肉より早い」との仮説をもとに、pHやストレスホルモンを中心に調査を行って若干の知見を得つつあり、今後も研究を継続して行く予定である。

オーエスキー病(A D)

全農家畜衛生研究所 浅井 鉄夫

オーエスキー病(A D)は、A Dウイルス(豚ヘルペスウイルス1型、仮性狂犬病ウイルス)によって引き起こされる感染症です。

A Dの浸潤は、地域的に限られ、ここ数年拡大していません。これは、A D発生時の初動防疫や豚などの流通の規制(検疫、陰性証明)など本病に対する取り組みが、地域的な分布にとどめる上で多大な成果につながっていると考えられます。

「A Dウイルスに感染したことがない」とか、「A Dワクチンを接種していない」といった、免疫がない豚群にA Dウイルスが侵入すると、非常に甚大な被害を被ります。妊娠中の母豚では、妊娠ステージに関係なく流産や死産を引き起こします。肉豚では、発熱・神経症状を呈し、幼若な豚ほど症状が重篤です。哺乳中、特に1週齢未満の子豚はほとんど(100%近く)死亡しますが、離乳子豚で25%程度、肥育豚で5%程度の死亡率といわれています。

本病の予防として、A D生ワクチンと不活化ワクチンが市販され、汚染地域で利用されています。ワクチンは、野外ウイルスによる感染を完全に防ぐことはできませんが、発症を防ぐことができます。

また、ワクチン接種豚では、A Dに感染してもウイルスのばら撒かれる(排泄)期間が短くなるため、農場内のウイルス量が減少し、清浄化につながります。A Dの清浄化を行っていく上で、ワクチン接種とあわせて、①計画的淘汰あるいは摘発淘汰、②A D生ワクチンの接種時期の指導、③消毒の徹底、④地域ぐるみでのA D対策についての啓蒙活動、などが重要となります。

一方、清浄化を困難にする原因として、①被害意識の低下、②経済的・労力的負担によるA D生ワクチン接種の不徹底、③呼吸器病のストレス、④地域の汚染率の程

度などが知られています。平成12年度の報告(家畜衛生週報より)では、ワクチン接種地域におけるワクチン使用農家戸数および接種率が減少する傾向でした。A Dの汚染率が高い地域での、農場の清浄化は、非常に困難ですが、A Dのみならず他の病原体との複合感染による被害を低減する上で、A Dワクチンの接種は不可欠といえます。

母豚へA D生ワクチンを接種する場合、分娩時期にあわせて(分娩予定日の1ヶ月前)接種する方法と年2回一斉に接種する方法が行われています。産歴の進んでいない母豚で抗体価が低いというような母豚群においては、抗体レベルのばらつきが小さくするために、繁殖候補豚に対して種付けを行う前にワクチンを2回以上接種する場合があります。

また、子豚に対しては、移行抗体(初乳から獲得する免疫)がなくなる時期に合わせてワクチンを接種します。A Dに初感染した農場では、移行抗体の推移が明瞭でないため、各メーカーの推奨する時期のワクチン接種を暫定的に実施し、一定期間後(たとえば半年後)に抗体検査を実施して、子豚へのワクチンプログラムを決める必要があります。

診断は、一般にウイルス分離試験と抗体検査で行われます。抗体検査法として、中和試験、酵素抗体法(ELISA)、ラテックス凝集反応が利用されています。移行抗体がなくなる時期を推定するためには、中和試験やELISAが有用です。

また、現在わが国で使用されているワクチンは、A Dウイルスのタンパク質の一部が欠損しているワクチンであるため、野外ウイルス感染による抗体とワクチンによる抗体を抗体検査により識別(区別)することが可能となっています。

母豚妊娠期の飼料給与

伊藤忠飼料(株)研究所 鈴木 保

交配後、分娩するまでの母豚の飼料はいわゆる妊娠期中と呼ばれます。TDNが70程度のものが一般的でしょう。妊娠期の給与方法は、結構まちまちでありこれぞというものはあまりありません。ただ交配後70日頃から増し飼いするのは共通しているようです。今回は少し妊娠期の飼料給与について考えてみましょう。

妊娠期といっても大きく分けて、交配後約1ヶ月の着床期、1ヶ月の安定期、2ヶ月の発育期と観ることができます。最も注意を要するのが着床期で、流産の可能性が最も高いため、決してストレスをかけてはいけない時期です。

安定期は、着床が終わり徐々に胎児となり羊水が溜まっていく時期で、妊娠鑑定が可能になります。発育期は胎児が異常なくらい急成長し、各種の栄養が最も必要なステージです。

単純に給与を考えると、着床期は最低の維持量を安定的に与え、安定期に少し増やし、発育期に倍増させればよいように思えます。しかしそれでよいのでしょうか？

母豚も当然生き物ですから、交配する時点でデブもいればガリもあります。それらに皆同量の餌をやってよいのでしょうか？デブは必要以上に沢山喰っているからデブであり、ガリは不足しているから痩せていると考えるのが普通でしょう。体調が悪い豚は繁殖が良いはずがありません。特にガリで離乳されてくる母豚は、発情が微弱です。太っているのはもっと始末が悪い。すなわち母豚の体調を整えておかないと、農場の生産性はいつまでたっても改善されません。母豚の体型も今流行の「改革」が必要なのです。

ボディコンとは？

そこでよく聞くのが、ボディコンです。決してピツパリとしたミニスカートのことではありません。ボディ・コンディション・スコアのこと、体調（太り具合）を

数値化したものです。写真のように腰の寛骨部の脂肪の付着度を手で触って1～5に判定するのですが、あまり絶対数値にこだわる必要はありません。地域、季節、豚舎構造、系統（育種系）や更新方法によって適正は大きく変わるからです。ある農場で4がよいからといって、すべて4に統一すべきではないのです。また未経産豚と老令豚でも当然違はずです。ボディコンの重要性は、むしろどこで肥満度を見分けるか、また定期的に調べて個体の体調を把握することにあるのです。

自分でベストと思う体型（当然季節によって変わってもよい）に豚群を調整するべく飼料給与量を決める。もちろん離乳時と分娩時とで体型が同じである訳がない。一般に妊娠後半（発育期）を対象にして体型を調整する方がやり易い。交配後1ヶ月は最低の維持量TDN70の種豚用で2Kg程度で充分。この時期はこころ操作せず、環境を安定させた方がよい。交配2ヶ月の安定期以降で体型作りを目的に給与量調整を行う。栄養の必要量としては、交配後70日以降急激に増加するので、基本量としては、その時期に増量（同飼料3Kg～3.5Kg）させることは問題ない。ただどの母豚も同じに増やすのではなく、体型の調整が目的であることを忘れないように。

この時期がもっとも体型の調整がやり易い。給与量はいじってもすぐには体型は変わらないので、給与量のチェックは2週間毎でも充分でしょう。たまに毎日給与量を変える人がいるが、それでは意味がありません。

体型は、ケンポローを代表とする赤肉系のハイブリッド母豚と、ゆとりのあるミートタイプ母豚では要求量も体型も異なります。また未経産豚は、絞り過ぎより余裕のある方が連産によいと考えます。

またハイブリッド豚とは言え、遺伝的にまだまだ斉一化されていないので、先天的な体型のバラツキもある。それを無理に細かく揃えようとするには無理がありま



ポディコン風景

す。

妊娠後期に飼料給与を絞ることに不安を覚える方も多いと思いますが、エネルギーが不足した場合に備えて、皮下に脂肪を蓄積しているのですから、子宮内の子豚を大きくするために、太った脂肪を実際に使うのです。そこで必要量を給与してしまうと、皮下脂肪はなくなりません。また痩せすぎた母豚は、飼料を増量してもなかなか太りません。短期間ではなく次産時までには太らせるつもりで気を長く持つべきでしょう。太る時も痩せる時も疾病でない限り、すぐには起こりません。それだけに給与量の調節もあせってはいけません。大型タンカーのように、舵を切ってから方向が変わるまでに随分タイムラ



1頭1頭給与量が違う

グがあるのです。

分娩末期に太らせ過ぎると、難産の原因になることはよく知られていますし、痩せすぎは、授乳中の摂取量が増えず、子豚の育成率、発育が低下したり、再帰発情が回帰しない事態を起こします。それだけに分娩舎に移動するまでの母豚の体型作りが繁殖の大きな鍵となります。

母豚の体型を観るのに何故寛骨部を触る必要があるのでしょうか。母豚は年令や大きさ、季節によって見かけでは実際の皮下脂肪の度合いは判りません。触ってみて初めて確認できるのです。一見痩せている豚の肥満度に驚くことでしょう。

母豚の群管理は個体管理の集積なのです。

●認定情報●

●平成13年度認定農場

[9月認定](有効期間:平成13年9月6日から14年9月末日まで)

北海道・ホクレン滝川スワインステーション、(有)山中畜産、ササキSPFファーム、寒河江農場、浅野農場、青森県・カワケンSPFファーム、岩手県・全農東日本原種豚農場、岩手県経済連種豚センター矢巾分場(肥育)、(有)ケイアイファウム北上農場、秋田県・秋田県経済連SPF種豚場、(資)深沢スワインファーム、宮城県・(株)シムコ岩出山事業所、福島県・(株)シムコ浪江事業所第一農場(肥育)、茨城県・常陽発酵農法牧場(株)、東京養豚農業協同組合岩井牧場、小沼養豚場、栃木県・サンエス大渡農場、(有)K&Tコーポレーション、群馬県・(有)小黑養豚、(有)ほそや、(有)畑中畜産、長野県・長野県農協直販(株)伊那SPF種豚センター、(有)岩垂原エス・ピーエフ農場、(有)SPF創成自農舎タローファ

ーム、(農)エスピーエフこがねや第一農場、クリーンパーク豊丘、新潟県・(有)ピー・ふぁーむ、千葉県・(有)東海ファーム、埼玉県・(有)松村牧場、神奈川県・(有)横山養豚、静岡県・(株)マルス農場、愛媛県・県農えひめ広見種豚増殖センター、香川県・(株)七星食品多和ファーム、長崎県・第三セクター職業訓練法人長崎能力開発センター、熊本県・(有)高森農場、(有)ニッポンフィード牧場木庭農場、(有)ニッポンフィード牧場高本牧場(繁殖)、宮崎県・(株)九州ノーサンファームえびの種豚場、(有)ニッポンフィード牧場西田牧場(繁殖)、(農)守山畜産、鹿児島県・(株)シムコ鶴田事業所、長野養豚、(有)ニッポンフィード牧場上別府農場(繁殖)、(株)九州ノーサンファーム大口農場(以上44農場)

※次回認定委員会は平成13年12月6日(木)の予定

●協会からのお知らせ●

●認定委員の交代

ホクレンピラミッドの協会認定委員が、高谷和宏氏から芹川 慎氏に交代になりました。

●次回のセミナーは来秋東京で

詳細は決定次第『協会だより』等でご案内します。ぜひ、ご参加ください。



セミナーは 何物にも代え難い 貴重な情報収集のチャンス

独立行政法人家畜改良
センター茨城牧場 **筒井真理子**

家畜改良センター茨城牧場では、清浄で優良な種豚を作出・供給するため、協会の方式を大変参考にさせていただいてきました。特に赤池会長やSPF豚研究会の山本会長には、当場の防疫対策の基本「清浄化維持マニュアル」原案作成時から全面的なご協力を仰いでおります。ご存じのとおり、病気を防ぐには少しの油断や手抜きも許されません。防疫作業は、シャワーやフェンス等、

設備の整備もさることながら、「自らが豚を守る」という気持ちを全職員が持つことから始まるといっても過言ではないでしょう。当场もこうしたソフト・ハード両面に対するサポートを先生方から頂戴しながら、無我夢中で今日に至っております。

このような中、『協会だより』を拝見し、またセミナーにも宮崎、北海道大会と続けて参加させていただき、どなたも試行錯誤の末、現在の状態に到達された方ばかりだと知りました。その農場がどのように苦境を乗り越られたか、また、克服しようとしているかについて具体的に伺うことができる、私共にとって何物にも代え難い貴重な機会となりました。



SPF豚と小型の豚

『畜産の研究』(養賢堂)
元編集長 **鈴木 章**

古い話を一つ紹介します。『協会だより』の表紙の下端に毎号「SPF豚のはじまり」という小さなコーナーが連載されていますが、皆さんはお読みになれていますか？まず創刊号のこの記事①を読むと、SPF技術が「1962年(昭37)信藤謙蔵博士によって紹介され、わが国のSPF豚開発の契機になった」と書かれています。この信藤博士の論文は、当時私が編集していた『畜産の

研究』16巻4～5号に掲載されたものですが、実はその4年前の1958年に私が「実験動物“小型の豚”とその育種」という論文を『畜産の研究』12巻10号に発表していました。しかも、信藤博士の論文に紹介されたアメリカのSPF豚作出設備の写真や説明は、すでに私の「小型の豚」の論文で発表したものとまったく同じものだったのです。

当時私は信藤博士から郵送されたきたSPF豚の原稿を手にして、国分寺市の農林省動物医薬品検査所を訪れ、検査部長の信藤博士に私の「小型の豚」の論文をお見せすると、博士はびっくりされて、ご自分の原稿の一部を手直ししてから、後日改めて私宛に送って来ました。その論文が「日本のSPF豚開発の契機」になったのです。



我々が望んでいる販売が まさに実現している 北海道

(株)林商店SPF豚出荷組合
木内養豚場 **木内 宏行**

私たちの肉豚出荷組合では、国産SPFポークセミナー北海道大会に参加した際、セミナー当日の午前中を利用してSPF豚肉の販売に積極的に取り組んでいるスーパー、デパートの食肉売り場を回りました。どちらも我々がまさに理想とする「生産者の顔の見える」販売が実現されており、大変うらやましく思いました。我々も、難しい問題も多々ありますが、一日も早くこうした販売を実現させたい、という思いが一層強くなりました。



女性にもっと 参加してほしい セミナー

(農)守山畜産 **守山 京子**

北海道のセミナーはすばらしい内容で、大変感動しました。さすがはホクレンさん、ですね。ただ残念だったのは、奥さん方の参加が少なかったことです。もっとこういう場にどんどん出て来て楽しんでほしいし、交流も持ちたいと思いました。「女性はいつも留守番」ではつまらないですね。

それから、SPF豚はやはりしゃぶしゃぶがほんとに美味しい、と改めて感じました。

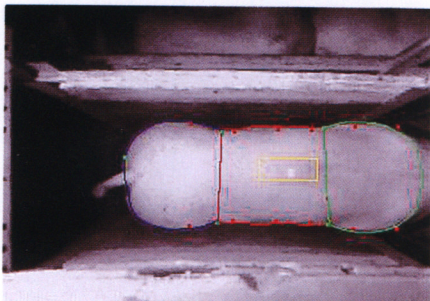
(株)シムコ の原々種豚場 「八尾育種改良センター」が開設



職員は手前の建物（グレーの屋根）で履き物を履き替えてから奥の管理棟（青い屋根）に向かう。農場入口はここだけ



種豚舎
（雌豚用ストールと一部雄豚房）



個体の採食量の測定と画像処理により体重を測定する装置



分娩室内部。1室に20分娩房がある

(株)シムコ生産ピラミッドでは従来、千葉県館山市のG G P（原々種豚場）でS P F種豚の育種改良を行っていましたが、事情があつてこれをG P（原種豚）農場にシフトしたため、新たにG G P農場を開設する必要に迫られていました。

このほど、富山県婦負郡八尾町に同生産ピラミッドのG G P農場の機能を持つ、「八尾育種改良センター」が開設されましたので紹介します。

●立地：富山市より南に21km、「おわら風の盆」で有名な八尾町の中心から約15km南に位置し、周囲は800m級の山々に囲まれた、人里離れた16haの盆地。標高は460m、地元では豪雪地帯として知られる。

●農場規模：施設面積10,920㎡。①雄舎64房、採精室4。②種豚舎♀400ストール、♂4豚房。③妊豚舎76ストール、④分娩舎6室（各20豚房）、⑤離乳舎77.2㎡×9室。他にA I室、管理棟、車庫、倉庫、糞尿処理施設等。

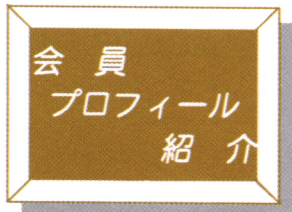
●飼養種豚数および品種：L220頭、W130頭、D100頭、雄各品種計64頭

●出荷計画：自社G P農場更新用1,700頭/年、肉豚出荷6,300頭、社外への種豚販売は行わない。

●主要設備：①SKOV社（デンマーク）製全豚舎、陰圧空調システム、離乳舎、分娩舎の暖房制御システム。②OSBORN社（イギリス）製の自動給餌、映像体側システム。③3次処理污水处理システム（伊藤忠林業；複合ラゲーン+3次処理設備。④濱田式糞発酵堆肥化処理システム。

●データ集積処理システム：自社製データベースソフト「シムコトンポイント」のデータ集積処理システムを用いて、自社5農場（本農場+4 G P農場）の全社的生産成績集計分析および育種データ処理。育種データ処理はBLUP法および選抜指数法により選抜交配を設計し、種豚の造成、維持、顧客の要望を満たす性能・変化に対応する。

●従業員数：三宅真佐男所長以下13名。



(有)ポークランド
(有)十和田湖高原ファーム
●秋田県小坂町

「ただ養豚に取り組むだけではない、素晴らしい商品提供と地域への貢献を大切に」と常々ファームのスタッフに語るポークランド・十和田湖高原ファーム代表取締役・豊下勝彦さん。自社ブランド「桃豚」生産と地域環境に配慮した里作りにも積極的に係わる経営が特徴です。

平成7年、肉豚生産組織「(有)ポークランド」が誕生し、続いて第2農場の十和田湖高原ファームが設立されました。両施設あわせて母豚3,000頭、年間SPF豚7万頭を生産・出荷しています。主な販売先は、首都圏の量販店や産直契約のほか生協も含まれています。従業員は47名、平均年齢25歳という若い企業です。

「養豚は臭くて汚い」というイメージからの脱皮を目指す豊下さんですが、JAかづの時代にポークランド設立構想がもちあがり、33歳の若さで代表取締役に就任しました。JA在職当時は養豚と無縁な金融畑出身の経営



者です。

平成6年、秋田県が県内食肉流通合理化計画を打ち出し、大型食肉施設「ミートランド」が当地に誕生しました。最初に食肉処理施設ができ、次いで平成7年、生産拠点としてポークランドが設立されました。種豚



豊下勝彦さん

は、JA全農のハイコープSPF種豚を導入、自社ブランド「桃豚」を生産・出荷しています。

販売は首都圏向けにとどまらず地域の方にも食べてほしいとの考えから地元のAコープかづのでも販売しています。さらに「桃豚の会」という産直組織を発足させ対応しています。現在の会員は、地元を中心に1,000人以上います。スタッフは配送時に直接会員から「桃豚」の食味について感想を聞くことができます。生の声が生産に対する意欲の原動力にもなっています。

特徴のもうひとつが環境対策です。ポークランド設立時に、養豚団地内に小坂クリーンセンターという糞尿処理施設が建設され、悪臭はほぼシャットアウトされています。同センターで処理された完熟堆肥は地域の野菜、果樹、稲作等に活用されています。悪臭を出さず、糞尿を貴重な資源として地域の田畑に還元する里作りにも貢献していると豊下さんは自負しています。実際に近隣の28戸の集落で里作りも進めています。「農業や化学肥料に頼らない稲作に取り組むことでどじょうやホタル、イワナが遊ぶ昔ながらの里を再現させたい」と夢は大きく膨らみます。

(JA全農畜産生産部・高島元子)

● 投稿歓迎 ●

編集部では会員の声を反映した誌面づくりをめざし、今号より「会員／読者のページ」も設けました。『協会だより』の感想、協会への要望、疑問・質問、エッセイ等、何でも大歓迎です。ぜひ事務局までお寄せください。お待ちしております。

編集後記
先日札幌で開催された国産SPFポークセミナーも、関係者のご尽力のもと各地から多数のご出席をいただき、盛況の内に終わりました。今回出席できなかった方も、次回のセミナーでお待ちしております。
さて、世間を騒がせている狂牛病問題、養豚には対岸の火事？という雰囲気を感じられるところもありますが、豚には豚の疾病問題が次から次と出てきますよね。また、この時期、人も体調を崩しがちになるので、豚さんも当然です。皆さんも体調に気をつけながら、豚舎内温度と衛生管理に十分留意して生産活動に頑張りましょう。(輝)

日本SPF豚協会だより

第5号 2001年10月1日発行(季刊)

発行 日本SPF豚協会

〒101-0047 東京都千代田区内神田1-2-6
TEL.03-5283-5021 FAX.03-5283-5022

発行人 赤池 洋二

編集人 林 哲